

平成とともに歩んだ奥羽大学歯学誌

瀬 川 洋

本学会誌が発刊される頃には、「平成」から新元号に代わっていることであろう。元号で1番長く続いたものは、昭和(1926年～1989年)の64年間、次いで明治(1868年～1912年)の45年間、南北朝合一後の応永(1394年～1428年)の35年間、その次が平成(1989年～2019年)の30年間である。ところで、本学は昭和63(1988)年12月に文学部設置が認可され、東北歯科大学から奥羽大学に名称が変更され、それに伴い、平成元(1989)年4月より奥羽大学歯学誌が発行された。本来、雑誌名が変われば当然、第1巻1号なるところが、なぜか第16巻第1号と印刷されていたのである。編集後記には、雑誌タイトルの変更理由と発行の大幅な遅れに対するお詫びが記載してあった。これは単純な編集上のミスであったのかと思い、頁を捲っていくと、第16巻第2号の編集後記にその理由が記載してあった。『さて本学「奥羽大学歯学誌」は昭和49年の創刊を第1巻とし、第15巻まで続いた「東北歯科大学学会誌」の後に生まれたものです。東北歯科大学が文学部の設置に伴い、総合大学として「奥羽大学」として産声を挙げました。歯学部の学術雑誌も「奥羽大学歯学誌」と装いも新たになり、同時に、雑誌名、巻、号をどうするかで論議が百出しました。「奥羽大学歯学誌」としては本巻は間違いなく第1巻なのですが昭和49年より16年にわたって親しまれてきました「東北歯科大学学会誌」との関連を重視しまして、通巻として第16巻を用いることになりました。御了承願います。』(原文記載のまま)。また、創刊から奥羽大学歯学誌第17巻4号まで「編集後記」は掲載されていたが、第18巻1号からは掲載されず、その後、24巻1号から新たに「トピックス」が掲載されるようになった。しかし、「巻頭言」は見当たらず、いつから掲載されたのか、バックナンバーを調べてみると、平成10(1998)年6月発行の第25巻第2号に「奥羽大学歯学会を考える」のタイトルで当時の山本茂久学会長の巻頭言が掲載されていた。文中、「現在、本学会の機関誌である奥羽大学歯学誌は、学会機関として十分な役割を果たし、その前身である昭和49年12月に刊行された東北歯科大学学会誌を含めると平成10年の本号第25巻2号で通巻90号となる。」(原文記載のまま)。この第46巻第1号は通巻何号になるのか。昭和とともに歩んできた「東北歯科大学学会誌」、

平成とともに歩んできて、これからも新年号とともに歩むであろう「奥羽大学歯学誌」は、最近、投稿論文が減少しているが、再び、質、量ともに充実することを願ってやまない。

(奥羽大学歯学会監事)